



Title	現代日本語の漢語動名詞の研究
Author(s)	小林, 英樹
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43325
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	小 林 英 樹
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 6 7 0 2 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 14 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科日本学専攻
学 位 論 文 名	現代日本語の漢語動名詞の研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 助教授 石井 正彦 (副査) 教 授 工藤真由美 教 授 蜂矢 真郷

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、複合語・派生語が文中で統語的にどのようにふるまうかという視点をもって、現代日本語の漢語動名詞（サ変になり得る名詞）の語構成を包括的に分析したものである。その構成は、「はじめに」及び「おわりに」を含む全 6 章に、注、資料、参考文献一覧、索引を付したもので、A 4 判 297 ページ、400 字詰め原稿用紙換算約 1100 枚より成る。

「0. はじめに」では、まず、従前の現代日本語の語構成研究が和語偏重であり、また、複合語・派生語の内部構造の類型化にとどまっていたとし、研究の対象を二字・三字・四字の漢語動名詞（VN）とした上で、本研究の方法論的特色が、①複合語・派生語が文中で統語的にどのようにふるまうか、②構成要素が文中で統語的・意味的にどのような影響を及ぼすか、という視点を重視するところにあると述べる。

「1. 動詞のタイプと非対格性」では、動詞の意味表示としての「語彙概念構造」及び動詞の非対格性の仮説にもとづいて、動名詞の非対格性が「VN をする」構文の可否に反映していることを述べる。また、自他両用の二字漢語動名詞が、意味体系上の分布において、『分類語彙表』の「抽象的關係」に多く「人間活動」の分野に少ないことを報告する。

「2. 二字漢語動名詞」では、「動詞的要素＋名詞的要素」型の二字漢語動名詞が、「動名詞内部の名詞的要素と関係付けられた項を取るか否か」「動名詞内部の名詞的要素が統語的に現れる項によってどのように特定されるか」という二つの観点から下位区分されること、「動詞的要素＋動詞的要素」型の二字漢語動名詞が、その主要部の位置から「両側主要部タイプ」「右側主要部タイプ」「左側主要部タイプ」の三類に分類できることを述べる。

「3. 三字漢語動名詞」では、接頭辞「再」と動名詞との結びつき（再 VN）を検討し、「再」の意味的なはたらきが「後行事態を表す文に先行事態を表す文の内項を共有させること」であることを述べる。次いで、接尾辞「化」について、動名詞のみの形（VN）とそれに「化」が付加された形（VN 化）との違い、「～に」と「VN 化」との共起の問題、「VN 化」の自他の問題を検討する。

「4. 四字漢語動名詞」では、「意識改革」「工場進出」などの「名詞的要素＋動詞的要素」型の四字漢語動名詞を語彙概念構造レベルで分析し、すべての項関係の複合語を統一的に扱うことができる「主要部位置への名詞概念の代入」を提案する。また、「冷凍保存」などの「動詞的要素＋動詞的要素」型の四字漢語動名詞に注目し、その基本的な分類と記述を行う。さらに、「強制着陸」のように、「～する」という形で使えない動名詞について、その非主要部

の意味的なはたらきを考えることによって、複合語の文中での統語的なふるまいに関して有意義な一般化が得られるとする。このほか、複合と「数」に関する選択制限、四字漢語動名詞と事態を表す名詞との関係などの諸問題を考察する。

「5. おわりに」では、上記各章のまとめと本研究の特色の整理を行った上で、今後の課題として、名詞意味論の充実をあげる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、これまでの現代日本語の語構成研究を、漢語よりも和語に偏ったもの、また、複合語・派生語の内部構造（構成要素間の結合関係）の分類・整理にとどまるものであると批判し、その現状を打破すべく、「複合語・派生語が文中でどのように統語的にふるまうか」という文法論的な視点を新たに導入し、また、「語彙概念構造」「動詞の非対格性の仮説」等の一般言語学的方法論をも採用して、現代日本語の漢語動名詞の語構成を論じた意欲的な論考である。

本論文によって、「～する」という形で使えない漢語動名詞が存在すること、複合することによって項が一つ減る複合語と減らない複合語とがあること、動詞的要素と動詞的要素で構成される二字漢語動名詞に（両側主要部・右側主要部のほかに）左側主要部のタイプがあることなど、これまで見過ごされてきた現象が発掘され、分析の新しい切り口が示されたことは大きな成果であり、これからの語構成研究の一つの方向性を提示したものとして有意義である。また、とかく内省のみに頼りがちな研究が多い中で、本論文は、新聞の社説約7年分から採集した延べ数万にのぼる漢語動名詞を主要なデータとしており、日本語以外の言語についての研究も豊富に参照して、客観的で説得力のある論を展開していることも高く評価できる。

漢語や動名詞の規定が必ずしも十分ではないこと、語構成分析の方法・手続きになお明確化すべき余地が残されていること、通時的な観点が不足していること、新聞の文章を資料とすることや、それに起因する臨時的な語と恒常的な語との区別の問題において、なお十分な配慮を必要とする、といった問題点もあるが、その多くは、この分野の先駆的・意欲的な試みに不可避免的に伴う困難であり、本論文の価値を損なうものではない。よって、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。